

六甲山は病んでいる。今こそ保全を

リレートーク 10人が講演

国際森林年にちなんだ「六甲山リレートーク」(シルバーカレッジ・神戸市建設局主催、グループわ など共催)が10月28日、カレッジホールで開催されました。昨年の生物多様性フェアに続く2回目の講演会で、生環コースの学生ら約300人が熱心に耳を傾けていました。

午前10時開会。新野幸次郎氏(神戸市都市問題研究所)が「神戸の象徴としての六甲山の保全」をテーマに基調講演。「六甲山は都市部にありながら、緑豊かで生物多様性に恵まれ、観光面からも市民の資源であり財産だ。しかし、最近は色々な問題を抱えるようになり、実効ある手立てを講じなければならない事態に至っている」と問題提起をしました。

次いで、KSCのOBら9人が、行政の立場から、観光の面から、山ガールから、ボランティアの立場から、4時間にわたって様々な報告と提言を行いました。

最後に「多くの恵みを与えてくれる六甲山は、いま病んでおり、保全のために知恵と力を集めよう」との六甲山市民宣言を採択。全員で「青い山脈」を歌って散会しました。(9人の報告内容は次の通り)

魅力生かして「森林戦略」

「六甲山は魅力がいっぱい」高畑正氏(神戸市建設局) = 神戸市は、景観がすばらしく、名所旧跡が多い六甲の魅力を生かして「六甲山森林戦略」を策定する。土地所有や植生、法規制等の現状を把握し、森林の将来像や保全・育成の方針、公的関与のありかたや財源、林産物の活用や人材育成などを踏まえ、森林管理を継続的に行う仕組み作りを検討する。

「六甲山の魅力を考える」豊田實(郷土史家) = 六甲山の歴史には古い日本人との関わりがある。神功皇后の六つの甲の埋蔵説、六根清浄を願う修業の山だったが、明治時代にグルーム氏達により開発され、村人たちが登山を始め、山に親しみ愛するようになった。私たちは「いきいきわくわく探検団」を組織して六甲山を歩き自然と仲良く生きることの良さを学んでいる。

「六甲山は、ちょっと変わった観光地」上田均(六甲摩耶鉄道) = 六甲山には年間200万人が訪れるが、いったい何を見に来るのだろうか。一般の観光地に「あるだろう」と思われるものがなく、他に類を見ない観光地だ。観光事業者の立場からは沢山の人に来てほしい。六甲の観光資源を再認識し、付加価値を付け、多様なニーズに応える「情報発信」基地を目指している。

「六甲山の清掃活動とグリーンベルトの植樹」岡俊明(兵庫県勤労者山岳連盟) = 六甲山からゴミを一掃する活動を1978年からしているが、ゴミを拾うことが



目的ではなく、きれいにすることであり、半永久的な活動になる。国交省の六甲山系グリーンベルト整備事業に「森の世話人」として参加し住吉川左岸で植樹と下草刈りなどを行っている。

「六甲山を活用する会の10年」堂馬英二(六甲山を活用する会) = 阪神大震災で六甲山の崩落箇所を目にして活性化を考えた。地域ビジョン委員会で六甲山を活用するプログラムを作成「六甲山を活用する会」を設立して、環境整備や環境学習をしてきた。市民の視点から「生活領域としての六甲山」を目指し、多くの賛同者・協力者を求め担い手を増やしたい。

「山ガールにも人気!親しみやすいコース満載の六甲山」根岸真理(登山指導員) = 六甲山は交通アクセスが整い、気軽に取りつき易い。最近ではファッショナブルな服装の山ガールが闊歩している。歩くことは、生活習慣病の予防やストレスの解消に効果があり、都市生活者にはぜひお勧めしたい。気軽に楽しめる六甲山で歩く習慣を身に付け健康な毎日を過ごしてほしい。

「須磨離宮公園森の倶楽部の活動」河上哲作(神戸女子大学教授) = 由緒ある離宮の森を市民参加で美しく、自然豊かにするとともに森の恵みを受取る。特にチョウやカブトムシあふれる生育環境の保全・整備と都市林づくりを目指している。安全かつ快適に回遊できる岡崎山散策コースを再生する。

「東お多福山のススキ草原の再生を目指して」橋本佳延(人と自然博物館) = 六甲山地最大の草原である東お多福山。59haあった草原は今や7haにまで縮小している。この草原の生物多様性を保全し、レクリエーションの場や動植物について学ぶ環境学習の場として活用することを目指した市民の取り組みを紹介する。

「かがやきの森の里山活動」道満俊徳(里山和楽会、生環13期) = 社会福祉法人「かがやき神戸」(北区)隣接の放置林を整備再生して、障害ある方・高齢者・子供が安心して自然に親しむ環境をつくり、里山を通じて地域住民と障害ある方が交流できる癒しの場にすべく、生の仲間15人と活動を始めて5年目。年間50回の山林整備活動を行っている。

写真 = 会場の参加者全員で「青い山脈」を歌う

(取材・生環15 池田惇)